

ベートーヴェン：序曲『コリオラン』

『楽聖』ベートーヴェン（1770-1827）が同時代に生きたウィーンの詩人ハインリヒ・フォン・コリンによる戯曲「コリオラン」より靈感を得、1807年に作曲した。ベートーヴェンは同年、交響曲第4・5・6番、ピアノ協奏曲第4番、ヴァイオリン協奏曲など数々の名作を生む、いわゆる「傑作の森」のさなかにあったが、ごく短期間に完成されたこの演奏会用序曲もその果実のひとつと言えよう。

戯曲の原作は紀元前5世紀に実在した共和政ローマ時代の将軍・コリオラヌス（ドイツ語名コリオラン）の生涯を、帝政ローマ時代のギリシア人・ブルタルコスが「対比列伝」（英雄伝）に記したものである。若くしてローマ軍を指揮し、コリオリの街を陥落させるなど数々の勲功により名声とコリオラヌス（「コリオリの勇者」）の尊称を得た貴族出身の将軍は、のちに策謀もあり政争に敗れ、ローマから追放されてしまう。復讐のため仇敵と結び、軍を率い祖国ローマを包囲したコリオラヌスだったが、ローマに残した母親と妻による嘆願により意を翻し、和議に応じて戦陣を引き払った。その後非業の死を遂げたという。己の尊厳と家族愛とのほざまでの葛藤が描かれた悲劇である。

序曲はコリンに献呈されているが、戯曲の上演時に演奏されることはなかったという。わずか314小節、演奏時間10分にも満たない小品ではあるものの、古典様式を遵守しつつもロマン派音楽を先取りする詩的表現に溢れ、戯曲の内容がほぼそのまま描かれた作品といってよい。

交響曲第5番と同じハ短調、アレグロ・コン・ブリオ。冒頭は全弦楽器によるハ音のみの強奏に始まる。数度のゲネラル・パウゼ（総休止）を経て、低音域のヴァイオリンとチェロにより、不安な独白を思わせるコリオランの主題が提示される。この主題は不規則に中断され、後年の「第九」の第一楽章を連想させる強奏が続く。やがてヴァイオリン、次いでクラリネットに導かれた木管楽器による柔和な第二主題があらわれるが、長調に解決することなく反復されると全楽器による悲痛な強奏となる。管弦楽は標準的な二管編成ながら、それぞれ一対のトランペット（ハ調/C管）、ティンパニ（ハ音・ト音/C・G）とホルン（変ホ調/Es管）の組み合わせからは長和音が得られることはない。ゲネラル・パウゼの多用が劇的効果を高め、強弱音の対比もこれを際立たせる。第一主題の動機はチェロによる無窮動的な伴奏に変容し、これを従えたヴァイオリンにより展開されるが、1本のファゴットが添えられることで緊張は高められる。再度あらわれる第二主題にはわずかに平穏な気配もみられるものの、戯曲の筋書き通り救いはまったく訪れず、「コリオラン」の主題は次第に力を失っていく。結尾は弦楽器のピチカートにより、息を引き取るかの如く閉じられる。（Tp. I.T.）

ブルックナー：交響曲第8番

ブルックナーは1824年にオーストリアのリンツ近郊のアンスフェルデンに生まれ、1896年にウィーンで没した。若くして生地の近郊にあるザンクト・フローリアン教会やリンツ大聖堂でオルガンの名手として活躍する傍ら作曲を行っていたが、交響曲の作曲に取り組んだのは40歳を迎える頃だった。交響曲作家としては遅咲きではあったが、生涯で11曲の交響曲を書き（最初の2曲は番号がついていない）、宗教的・オルガンの響きを特徴とした唯一無二の作品たちを遺した。これらの特徴は、オルガニストとしての経験と、彼自身が敬虔なカトリック信者であったことと無縁ではないだろう。また、彼の交響曲が人間的な生々しさよりも人知を超えたものに対する無垢な畏敬の念を表しているように感じさせるのは、彼の純朴な性格に由来するのだろう。ちなみに、純朴すぎる性格が災いしたのか、晩年に至るまでに何人もの若い女性に求婚するもいずれも断られ、生涯独身であった。また、並外れた大酒飲みとしても知られており、この酒好きが晩年の病気の遠因という説もある（最後の交響曲が未完に終わったのが酒のせいだとしたら悲しい限りだ）。

これは筆者の思い込みによるところが多分にあるかもしれないが、アマチュアオーケストラ奏者同士で「どの作曲家が好きか」という会話をしているときに「ブルックナーが好き」と答えると、大概の場合ある種の独特な反応が返ってくるように思う。特に、筆者のように弦楽器奏者がブルックナー好きを表明する場合は、「へええ、弦なのにブルックナー好きなんだ？」というような反応を受けることがしばしばある。ブルックナーの交響曲というと、「長い」「重い」「弦楽器はトレモロ（同じ音を連続して小刻みに弾くこと）ばかりで、おいしいところは金管でしょ？」などと言われることが多く、何となく敬遠している人も多そうである。確かに、ブルックナーの交響曲はどれも演奏時間が長く曲想も重厚であり、聞き進めるにはそれなりの忍耐が必要である。また、ほかの作曲家の作品に比べれば弦楽器のトレモロが多い（＝腕が非常に疲れる）のも事実だ。しかし、随所にちりばめられた魅惑的な旋律（金管だけではなく、もちろん弦楽器もたくさん受け持っている）や、石造りの教会に反響するオルガンや薄暗い堂内でひとときわ光彩を放つステンドグラスを思わせる響きに虚心に耳を傾ければ、ブルックナーの作品の尽きせぬ魅力に気づくことだろう。

本日演奏する交響曲第8番は、彼の交響曲の中でも傑作中の傑作である。本作品は、ブルックナーが60歳になるろうとする1884年7月から作曲が開始され、3年後の8月10日にひとまずの完成を見せる（第1稿）。「ひとまずの」とは、交響曲第7番も指揮したブルックナーのよき理解者である指揮者のヘルマン・レーヴィに総譜を送るも、「演

奏不能」と判断されたことを受けて改訂を行ったためである。信頼するレーヴィからの拒絶はブルックナーに深刻な精神的危機をもたらし、一時は自殺も考えたようである。しかしブルックナーはこれを乗り越えて1890年の3月10日改訂作業を終え（第2稿）、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世に作品を献呈した。本作品が作曲されたのは、前作の交響曲第7番が大成功となり交響曲作家として確固たる地位を築きつつあった時期であるが、同時にブルックナーが自身の健康問題に向き合い、死をも意識するようになった時期でもある。この作品には自身の世俗的な栄光を投影するというよりもむしろ、生と死に対する省察や神による救済といったことをテーマにしているように思う。

本作品は3管編成の採用やハープの使用など、ブルックナー作品の中でもとりわけ巨大な編成となっている。こうした大編成が生み出す魅力的な旋律・響きもさることながら、本作品を偉大な交響曲たらしめているのは、陰鬱な第1楽章から始まり第2楽章の熱狂、第3楽章の瞑想を経て、フィナーレにおいてそれまでのすべてが統合されるという楽曲構成によるところが大きいだろう。こうした構成はベートーヴェンの「第九」に通ずるものがあり、実際ブルックナーは「第九」を強く意識していたことは間違いない。しかし、「第九」では終楽章においてそれまでの楽章を否定し、有名な「歓喜の主題」に至るのに対して、ブルックナーの第8においては曲の最後でそれまでの楽章を統合するというかたちで大団円を迎えるという点で大きく異なる。終楽章のこの大団円に至るまでは長い長い道のりであるが、ぜひともオーケストラとともにその道程を楽しんでいただきたい。

なお、この交響曲のようにブルックナーは完成した自分の作品に後から手を加えることが度々あり、同じ曲でも複数の稿が存在する場合がある。さらに、ブルックナーの死後に新旧2つのブルックナー全集が刊行され、それぞれに特色があることから、ブルックナーの交響曲を演奏する際に「どの楽譜を使うか？」ということは厄介な問題である（ちなみに、第3次全集版の刊行に向けた作業が現在進行中である）。第1稿と第2稿、および旧全集版と新全集版の差異については紙幅の都合で割愛するが、本日の演奏で使用するのは、第2稿に基づきながらも第1稿の要素も多く取り入れた校訂版である旧全集版（いわゆる「ハース版」）である。

第1楽章 Allegro moderato ハ短調 2分の2拍子

3つの主題を持つソナタ形式。ブルックナーは、この作品を演奏することを請け負っていた指揮者のヴァインガルトナーに宛てた1891年1月27日付の手紙で、第1楽章について以下のように述べている。「主題のリズムからなるトランペットとホルンの楽節は〈死の告知〉です。これは徐々に散発的に強くなってゆき、ついに非常に強い音で現れます。最後の部分は〈あきらめ〉です。」（この書簡

は本作品の初演の機会を作るべくどうにか作品を理解してもらうために書かれたという側面があり、手紙で述べられているコンセプトは必ずしも本作品の作曲に先立って固められていたものではないことには留意すべきだが、楽曲理解の一助にはなろう。ちなみに、ヴァインガルトナーは結局ブルックナーの存命中にはこの曲を指揮しておらず、初演はハンス・リヒターの指揮で行われた。）

曲はヴァイオリンの静かなトレモロとホルンのユニゾンで始まり、ヴィオラ以下の弦楽器に重苦しい第1主題が現れる（譜例1）。この第1主題のリズム・動機は全曲を構成する上で支配的な要素となっているため、是非とも耳に焼き付けて聞き進めていただきたい。なお、本主題はベートーヴェンの「第九」冒頭の動機（譜例2）と、極めて似たリズムを持っている。第1主題と対照的に温かみを感じさせる叙情的な第2主題は、いわゆる「ブルックナーリズム」と呼ばれる音型でバイオリンに現れ（譜例3）、第3主題は弦楽器のピッツィカート伴奏に管楽器で示される。クライマックスでは金管楽器群によってハ音の〈死の告知〉が繰り返された後、不気味な静寂が訪れ、第1主題が消え入るような形で第1楽章を締めくくる。

第2楽章 スケルツォ Allegro moderato ハ短調 4分の3拍子

主部 - トリオ - 主部の三部形式。先に述べたヴァインガルトナー宛ての手紙で「主要主題は、ドイツのミヒエルと名付けました。第二の部分で、この男は眠ろうとします。そして夢の中で彼は自身の歌を見つけることができせん。ついにこの歌は、嘆きつつ自らを転回させます。」と述べている。曲はヴァイオリンのトレモロで始まり、ヴィオラとチェロがいささかごつごつした感じの主題を提示する（譜例4）。壮大なフィナーレをより一層堪能するために、この主題もぜひ耳に焼き付けていただきたい。

トリオはスケルツォに比べてゆったりとした曲想であり、転調を繰り返しながら幸福や祈りの中を漂い、静かに終わる。トリオ終了後はスケルツォ主部を繰り返し、第2楽章を締めくくる。

第3楽章 アダージョ 変ニ長調 4分の4拍子

ただただ美しい楽章。“Feierlich langsam, doch nicht schleppend（荘重にゆつくりと、しかし引きずらないように）”という指示がある。ブルックナーの交響曲の中で最も美しい楽章ではないだろうか。この長大な緩徐楽章を3楽章に据え、スケルツォを第2楽章に配置するという構成は本作品が「第九」を意識していることの証左とも考えられるが、作品の重心を楽曲全体の後半に据えることでフィナーレの高揚をより効果的なものにするという楽曲構成上の狙いも大きかったものと考えられる。

曲はさざ波を思わせる弦の音型に始まり、それに乗って第1主題の主要旋律（譜例5）が第1ヴァイオリンによ

って提示される。こちらもフィナーレで統合される重要な主題である。その後チェロやテノール・チューバなどに主要な楽句が現れ、何度も音楽が高潮していく。シンバルを伴う最後の頂点の後、穏やかな雰囲気となり、別れを惜しむかのように静かに曲を閉じる。

第4楽章 フィナーレ ハ短調 2分の2拍子

“Feierlich, nicht schnell (荘重に、早くなく)”との指示があり、ソナタ形式で書かれている。さまざまな解釈がありえるが、ブルックナー自身はこの楽章について前述のヴァインガルトナーあての手紙において「私たちの皇帝は、当時オルミュッツでツァール [ロシアの皇帝] の訪問を受けました。それゆえ弦はコサック兵の騎行を、金管は軍楽を、トランペットは両陛下が会見するときのファンファーレを描いています。最後にすべての主題が(滑稽ですが)タンホイザーの第2幕で王が登場するときのように、ドイツのミヒエルが彼の旅から帰ってくる時、いっさいのものがすでに輝きのうちにあります。フィナーレ

では、死者の行進もあり、それから(金管の)変容があります」と述べている。

静かに瞑想的な雰囲気が終わった前楽章と対照的に、強烈なエネルギーとともに曲は開始される。弦の激しいリズムの上に金管楽器が第1主題(譜例6)を奏し、次いでコラル風第2主題、薄暗い雰囲気な第3主題が提示される。荒々しい「死の行進」などを経て、ようやく壮大かつ圧倒的な威容を誇るコーダに至る。まずホルンが本楽章第1主題の動機を奏し、高揚していくとホルンによって第2楽章のスケルツォ主題(譜例4)が現れる。やがてハ長調で、全4楽章の4つの主題の音形が重ね合わされる。第1楽章の主題(譜例1)はファゴット、第4ホルン、トロンボーン、バス・チューバ、低弦が、第2楽章の主題(譜例4)はフルート・クラリネット・第1トランペットが、第3楽章の主題(譜例5)は第1・第2ホルンが奏している。これらに第4楽章の主題要素(譜例6)が重ね合わされ、全曲を力強く締めくくる。

(Vc. M.Y.)

譜例1 Va., Vc., Kb.

譜例2

譜例3 Vn.I 3 cresc.

譜例4 Va., Vc.

譜例5 Vn.I

譜例6 Hr., Trb.

♪ 今後のスケジュール

- ・室内楽演奏会
2024年6月2日(日)午後
軽井沢大賀ホール
詳細未定
- ・第55回 定期演奏会
2024年9月29日(日) 14時開演
杉並公会堂 大ホール
指揮 出口大地
ベートーヴェン
交響曲 第4番 変ロ長調
交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」
- ・第56回 定期演奏会
2025年1月19日(日) 昼公演
杉並公会堂 大ホール
詳細未定